

本作りの現場で使用される人工物とその発達：事例調査最終報告

高橋 秀明^{*1*2}

Artifact Development in the Process of an Academic Book Making:

Final Report of Case Study

Hideaki Takahashi^{*1}

Abstract - This report describes the process of an academic book making from the perspective of artifact development. One editor of a publisher, two co-editors/writers, and 4 writers are interviewed in the format of critical incident technique. 7 interviewees use several kinds of artifacts and psychological tools and their usages are changed in the book making process.

Keywords : Book, Artifact development, Psychological tool, Interview, Critical incident technique

1. 問題

報告者は、メディアの認知心理学的な研究を行ってきた（たとえば、高橋(2006)、高橋(2007)、高橋・山本(2002)など）。高橋(2006)は「メディア」という用語を、(1)媒介・媒質、(2)道具、(3)形式・様式、(4)意味内容・コンテンツ、という4つの側面から捉えた。本プロジェクトのテーマである「人工物」とはこの内の「道具」ということと同義である。ただし、高橋(2006)では、道具について、単なる物理的な道具ばかりでなく、心理的な道具ということにも触れている。心理的道具とは、もともとはVygotsky(1979)の概念である。Vygotskyは、心理的道具の代表例として、言語を上げている。つまり、他人とコミュニケーションを取るために、あるいは自分の思考のために、人間は言語を心理的道具として使用している、という訳である。Vygotskyはその他に、各種の記号や地図、記憶するために指にひもで結び目を付けておく、といった例を挙げている。

高橋(2007)は、説明という心理的な過程を、各種のメディアがネットワーク的に関与する複雑系として捉えた。そこで、「人工物」についても同様に考えることができる。人工物は単独で存在しているのではなく、他の人工物とネットワーク的な関係において存在しているばかりか、人間によって使用される際には、心理的道具としても使用される、あるいは別の心理的道具と一緒に使用される、ということである。こうして、人工物のネットワーク性や重層性ということを導くことができる。

さて、報告者は、本プロジェクトにおいて、本作りの現場での人工物発達学を研究テーマとしたが、その動機

や背景は、以下の通りである。

当然のことであるが、本も人工物の1つである。本は、その内容を読者に伝えるための人工物である。一方で、現代のICT技術の発展に伴い、本というメディア・人工物のあり方が変わりつつある。つまり、本という物理的な形にしなくとも、電子的な情報として流通することが可能になってから久しい。そこで、現在の本作りの現場についてあらためて調査しておく必要があると判断した。

本作りの現場には、さまざまな立場の人間が関与している。まず、本を実際に執筆する執筆者、複数の執筆者からなる原稿を構造化し1つの本としてまとめ上げる編者、本の内容をチェックする監修者、実際に本という形に仕上げるための裏方的な立場であるが、出版社に在籍している編集者といった人間が関与している。さらに編集者の背後には、出版社のスタッフ、印刷所、流通に関わる書籍店、営業に関わる宣伝会社、学術的な書籍であれば、専門学会、書評の関連でマスコミなど、関与している。そして、将来の読者も当然関与することになる。こうして、本作りの現場を調査することは、このようにさまざまな立場の人間の間で行われるコミュニケーションの実際を対象とすることになり、本プロジェクトの題材としてばかりか、メディアの認知心理学研究の事例としても最適であると判断した。

今回調査対象とした本は、認知心理学の分野でコミュニケーションを扱った本であり、本プロジェクトの初年度の共通テーマである「伝える」ということに直接関連している。そこで、今回の調査対象としてふさわしいであろうという判断も働いた。

報告者は、別に「科学コミュニケーション」に関するプロジェクトにも入っている（三輪・高橋(2008)）。科学

*1: メディア教育開発センター・総合研究大学院大学

*1: National Institute of Multimedia Education / Graduate University of Advanced Studies

*2: 本報告は、高橋(2008b)の中間報告をもとに、新たなデータ分析の結果にもとづいて執筆したものである。

をテーマとした本作りの現場に関する研究を行うことは、本作りに関わる異領域、異分野、異なる立場の人間の間のコミュニケーションに関する研究という意味で、「科学コミュニケーション」研究としても有意義であると考えた。

2. 目的

本作りの現場についての論考、調査、報告は、ジャーナリズムからのものが大部分である。報告者の研究分野である、認知心理学や認知科学から、本作りの現場にアプローチしたものは、報告者の知る限り存在していない。ただし、本作りの現場における特定の心理過程に関連した認知心理学や認知科学からの研究は存在している。たとえば、「文章を書く」ことについての先行研究は、本論のような立場・目的を有していないので、問題や限界があると考えている。その問題点・限界点については、後述の「結果と考察」においてふれたい。

以上から、本作りの現場に対する最初の研究として、本研究を位置づけることができると判断した。そこで、まずは、現場で起きていること、つまり事例の収集を行い、現場で起きている出来事を記述することから研究を開始する必要があると考えた。

具体的な、研究課題としては、

- ・本作りがどのように行われているのか？
- ・その本作りの過程において、どのような人工物が使われているのか？
- ・その人工物の使用は、本作りの過程においてどのように変化（発達）していくのか？

という観点から、事例を収集することにした。

今回対象とした本は、編集本であり、複数の編者が存在している。編者は同時にある章の執筆者でもあるのでここでは編著者と記す。そこで、編著者と編著者、編著者と編集者(出版社)、編著者と執筆者、編集者と執筆者、というように、さまざまなコミュニケーションの形態が存在している。そこで、

- ・コミュニケーションの形態の違いによって、使用される人工物とその変化が異なるのか？

という観点も、取り上げることにした。

以上から、本研究の目的は、本作りの現場において、その過程において使用される人工物とその変化を記述すること、その上で、その過程について仮説を生成することである。

3. 方法

本作りの過程におけるイベントを、人工物の観点から収集し分析するという最初の研究という点から、本研究においては、本作りに関わった人々へのインタビュー調

査を行うこととした。インタビュー調査における、データの収集ならびに、分析方法は以下の通りである。

3.1 データ収集方法

インタビュー調査では、クリティカルインシデント法を応用した半構造化インタビューを採用する。クリティカルインシデント法とは、主に、事故分析において使用されてきた方法であり、事故という出来事に関連して、当事者の失敗経験を、その文脈に関する情報とともに想起してもらうものである。本研究では、本作りの過程におけるイベントを、当事者が失敗とか問題とか感じていないことも含めて、そこで使用された人工物に注目してもらい答えてもらうこととした。インタビュー協力者の回答に応じて、質問の内容が変わっていく、半構造化インタビューを採用した。以下、インタビューガイドおよびインタビュー協力の同意書については、三輪・高橋(2008)での方法を参考にして、本研究の対象にあわせて報告者の責任で修正して作成した。

インタビューガイドを作成し、事前に調査の概要を伝える。インタビューガイドは、インタビュー協力者に応じて内容を変えて作成した。すなわち、インタビュー協力者が、編著者、編集者(出版社)、執筆者の場合に応じて、3種類作成した。具体的には、付録1・2・3を参照のこと。なお、これらのインタビューガイドにおいては、調査対象となった書籍名について、「(書籍名)」と記している。具体的な書籍名を公開することはできないためである。

インタビュー所要時間は一人、最大120分とした。本作りの過程でのイベントとして各種各様のものがあると想定されたので、所要時間を通常のインタビューよりも長く取っている。

インタビュー調査を開始する前に、インタビューの進め方、データの記録、得られたデータの扱いに関して、インタビュー調査協力の同意書に署名の上、報告者と協力者とで一部ずつ交換した。調査協力の同意書は、付録4を参照のこと。

インタビュー場所は、インタビュー協力者の所属機関とした。すなわち、訪問調査である。

インタビューは、インタビュー協力者の許可が得られてから、ICレコーダによって録音した。

インタビュー実施後、できるだけ早い時期に、インタビューメモを作成した。これは、インタビュー協力者に確認を求めているわけではない。あくまでも報告者の記録のために作成したものである。

3.2 データの分析方法

書き起こしの内容分析を行う。まず、テキストデータをイベント毎に分割する。次に、1つのイベントの構造を分析する。そして、収集したイベントを類型化し、そ

の概念枠組みを構築する。

3.3 インタビュー協力者と調査期間・場所

ある1冊の書籍について、その編集者（出版社）、編著者、執筆者を対象とした。初年度は、編集者1名、編著者2名、執筆者1名へのインタビューを、本年度は、執筆者3名へのインタビューをそれぞれ実施した。編著者2名については、第1編著者を編著者1、第2編著者を編著者2と区別する。執筆者4名については、それぞれ、執筆者1、執筆者2、執筆者3、執筆者4と区別する。

インタビュー協力者・実施日時・実施場所は、表1のとおりである。

表1 インタビューの実施日時と場所
Table 1 Date and Place of Interviews.

インタビュー協力者	実施日時	実施場所
編集者	平成19年12月19日(水) 13:55-16:00	関西 所属先
編著者1	平成19年12月20日(木) 10:05-12:15	関西 所属先
編著者2	平成19年12月20日(木) 14:00-16:15	関西 所属先
執筆者1	平成19年12月21日(金) 10:00-12:45	関西 所属先(内留先)
執筆者2	平成20年6月23日(月) 14:30-16:00	四国 新所属先
執筆者3	平成20年6月30日(月) 14:15-15:30	九州 ホテル喫茶店
執筆者4	平成20年7月1日(火) 9:50-11:20	九州 所属先

編集者は、大学院修士課程を修了してから出版社に入社しており、研究者マインドを有している。入社後2年目であるが、学生時代から同出版社にアルバイト勤務していた経験がある。上司である編集長からの命令で、対象書籍を担当するようになった。

これ以外の編著者および執筆者は、すべて、大学院博士課程を修了または単位取得退学した後、大学の教員になったが、執筆者3のみは大学が開講している講座の担当を主な業務としている。また、執筆者3のみ女性である。

執筆者1は所属先で対象書籍に関わる執筆を終了していたが、インタビュー時には内地留学制度を利用して別の大学に所属していたため、内地留学先でインタビューを実施した。

執筆者2は執筆時には大学院生であったが、インタビュー時には別の大学に就職した。インタビュー実施年の4月に新しい所属先に移り、そこでインタビューを実施した。執筆者3は、スケジュールの都合上、所属先に近

いホテルの喫茶店でインタビューを実施した。

4. 結果と考察

インタビュー時の観察結果ならびに、インタビューでの回答内容を分析した結果を以下のように3つの観点からまとめ、それぞれ考察を加えたい。

4.1 インタビュー実施時の協力者の様子から

インタビューに回答する際、すなわちイベントを想起する際に利用する手がかりに、協力者によって違いが見られた。これは、協力者の個人差ばかりでなく、本作りでの実際の作業の内容や人工物も関連していると思われる。

・編集者（出版社）：主に記憶に基づいて回答

本作りの過程におけるイベントとしては、実物（印刷された原稿や文書）という人工物を使用しているものが多い。編著者や執筆者との連絡には、電子メールと郵便・宅配便による文書の通信とを使用している。

・編著者1：主にラップトップPCに保存されている電子メールに基づいて回答

対象とした本において、最も責任ある立場である人物だが、他の人物との連絡は基本的には電子メールで行っていた。原稿が上がってきて、編集作業に移ってからは、印刷された原稿や文書での作業も多く行ってきた。

・編著者2：主に当該の本に関わる資料、文書、時々電子メールに基づいて回答

基本的には、資料や文書に基づいて回答した。日時など微妙な問いに回答する際には、自分のデスクトップPCに残された電子メールを確認することを行った。

・執筆者1：主にラップトップPCに保存されている文書ファイルに基づいて回答

執筆の際に使用したラップトップPCに、執筆の途上のファイルを保存していた。執筆の際には、まずは裏紙に筆記具でメモを取り、ある程度まとまったらPCのワープロで電子ファイルに入力しすぐに印刷しておく、その印刷された用紙にまたメモを付け足していく、というようにして原稿を完成させた。

なお、執筆者2と3については、実際の執筆の現場とインタビューの現場とに共通点や一致点がきわめて少ないことから、上記のようなパターンを見いだすことはできなかった。執筆者4については、主に記憶に基づいてインタビューに回答していたが、報告者がより正確な情報を求めれば、上記のようにPCを参照して回答したと思われる。

本節の内容については、「インタビュー調査における回答手がかりについて」と題しては、高橋(2008a)で報告した。付録5を参照のこと。

4.2 本作りの現場で使用されている人工物について

て

7人のインタビュー協力者が、本作りの過程で使われた人工物としては、以下が上げられた。

- ・据え付け電話
- ・携帯電話
- ・デスクトップPC
- ・ラップトップPC
- ・電子メール
- ・文書

印刷された文書自体

文書のやり取り（郵送や宅配便）

また、人工物ではないが、対面コミュニケーションという形態も取られていた。電話については、携帯電話が緊急時に出発から連絡する必要がある時に使用される以外は、据え付け電話が使用されていた。本作りの過程では、一番最初の執筆依頼、初稿戻し、執筆者紹介文提出、というような大きなイベントの際に、郵送や宅配便での文書のやり取りという人工物が使われるが、同時に電子メールでの連絡も行われる。PCは、原稿や文書の作成および、電子メールやWebによる文献検索などインターネット利用のために使用される。インタビュー協力者によって、デスクトップPCとラップトップPCとの使い分けが見られている。

4.3 本作りの過程におけるイベントと人工物発達について

4.3.1 企画

編著者1が最初に本の企画書を編集者に送った際には、すぐに編集者（インタビュー協力者の上司である編集長）が編著者1の所属先に出向き、編著者2も集まって、3者による対面での打ち合わせが行われた。いわゆる企画会議である。インタビュー協力者である編集者によると、丁寧な本作りの場合には、執筆者も含めた対面での企画会議を実施したいとのことであった。編著者の2人は、基本的には電子メールによって、企画内容について検討していった。

本作りの企画においては、本の内容や構成と執筆者とを確定することが主な目的となる。編著者や編集者は、企画の段階では、執筆者と面識がない場合がある。編著者1は執筆者4とは面識がなかったが、編著者2と執筆者4とは面識があった。また、企画の段階と完成の段階で執筆者が異なることもある。執筆者3は当初企画段階では執筆者ではなかったが、当初予定の執筆者が執筆を断念したため、執筆者2が編著者の求めに応じて紹介し、執筆者に加わった。執筆者3に正式に原稿執筆依頼が来るタイミングは、原稿提出締切後であったことから、企画と原稿作成と編集というイベントが同時進行していたことになる。

本作りの過程における企画段階には、どのような内容であれば意義や意味があって売れるのかといった消費者心理やマーケティング、本を完成させるまでのプランニングといった心理過程が関連しており、編著者や編集者といった立場の異なる複数の人間が関与する過程でもある。このような心理過程に関しては、竹村(2000)などの研究があるが、本作り自体を対象にした認知科学や認知心理学からの研究は、筆者の知る限り存在していない。

本作りにおける企画段階は、「企画書」という文書が紙という人工物の形で用意され、「企画会議」という形で関係者による対面での打ち合わせが行われて合意形成がなされるというイベントに結晶化される、とまとめることができると言えよう。

4.3.2 原稿作成

執筆者は、原稿執筆依頼を受け取ってから、原稿を提出するまで、長時間にわたるイベントをさまざまな人工物を利用しながら体験していくことになる。認知心理学や認知科学の観点から「書く」という心理過程についての研究は蓄積されているが（茂呂(1988)や内田(1990)など）、実時間で長時間にわたり原稿を完成させていくこと自体を対象にした研究は、作文教育の実践など教育現場での研究をのぞくと皆無である。また作文教育の実践研究は、本論のように、人工物発達の観点から行われてはいない。

インタビュー協力者である、執筆者4名はそれぞれ以下のように原稿を作成した。

執筆者1：いきなり原稿を書き始めるということはない。通常の授業や研究活動をしながらか、原稿のことを気にしつつも、心の中でネタ集めをする。ある程度のネタが揃うと、A4用紙の裏に、メモを書き付け、書き足していきながらか、文章の構造を整理していく。書くことが無くなると、ラップトップPCのワープロに入っていく、印刷しておく。その印刷された紙を見ながらか、ネタに気にとめつつ、メモを書き足しつつ、構造を整理しつつ、ということをして3回くらい繰り返していると、だいたい原稿はできあがる。ワープロは清書のための機器の位置づけである。

執筆者2：原稿依頼を受けて、内容について4つの軸で書くことを思いついた。所属先の居室は作業室と共用なので落ち着いて原稿を書くことができないので、時間を見つけて、ラップトップPCを持ち出して喫茶店などに行って、少し原稿を書く、ということをして繰り返した。これは気分転換にもなり良かった。4つの軸については別々に書いていき、最後にまとめ直して原稿を完成させた。

執筆者3：ピンチヒッターなので最初は不安だった。博士論文執筆と重なってしまい、そのメドが立ってから、

こちらの原稿を本格的に執筆しはじめた。執筆内容に関連する実践をすでにたくさん行っており、その実践のための教科書も書いている。よって、原稿の構想はすぐに立てることができた。所属先と自宅とにデスクトップPCがあるが、ラップトップPCも持ち歩いており喫茶店などで執筆することも多い。ファイルを日付毎に保存しており、ある程度書きためてから、最終的に構造化して完成させた。

執筆者4: : 所属先と自宅とにデスクトップPCがあるが、ラップトップPCも常時携帯している。所属先で、ネットワークにつなげて、毎日ハードディスクを更新し、常に最新のデータを複数のPC間で共有できるようにしている。原稿作成には、ワープロも使用するが主にはエディターを使用している。原稿で使用した例文については、妻に解釈の可能性を問い合わせてみた。

当然のことであるが、執筆者4人は全て、日常生活の中で、当該の原稿作成のみの作業を行っているわけではない。通常の仕事（教育や研究、他の論文執筆など）を行いながら、原稿提出締切まで少しずつ時間を確保しながら、原稿を作成していくわけである。原稿作成のために使われる人工物は、紙やPCばかりでなく、ネタ探しのために対面での研究会に参加したりインターネットで検索したり、ということが行われる。紙やPCは自宅や所属先というように同じ場所で使用されるばかりでなく、喫茶店などの場所で使用されたり、通勤や出張など移動中にも使用される。このように、原稿作成のための人工物が変化したり、使用される場所や時間が変化することにより、原稿作成の内容自体にも変化が生じる。

本作りにおける原稿作成段階は、原稿というコンテンツが完成されるイベントに結晶化される、とまとめることができると言えよう。

4.3.3 編集

編集に関する認知心理学や認知科学の観点からの研究は、五十嵐(2008)が出たばかりである。しかし、本報告のように、実際のデータに基づいた研究は、報告者の知る限り皆無である。

原稿は、まず編著者1が査読をして訂正やコメントを入れてから、編著者2が作業を行って、編著者1に返された。この作業では、実際の文書のやり取りが多くなされた。また、別件で対面で会う機会を利用して、文書のやり取りを行ったり、打ち合わせを行うこともあった。

編著者が行った編集作業としては、章立ての確定、文体の統一、用語の統一、間違いの訂正があった。章立ての確定とは、報告者自身が執筆した章の扱いが、当初各論を集めた位置から、初校時に総論を扱っている位置に変更され、二校時に再度各論を集めた位置に戻る、というように変化した。文体の統一や間違いの訂正は、ゲラ

に書き込む形で行われた。用語の統一については、特に編著者2が重視していた。本全体としての統一感を保つために、本の主題となる用語の統一が行われた。

編著者2によると、ある執筆者から電話相談があったとのことである。その相談内容は、単なる電子メールでのコミュニケーションでは解決できなかったことだと、相談を受けた編著者2は認識している。その後、その問題は解決した。

このように連絡のための人工物としては、通常は電子メールや文書のやり取りが使用されたが、ある種のトラブルが発生した際には電話という他の人工物が使用されていた。

本作りにおける編集段階は、最終ゲラというコンテンツが完成されるイベントに結晶化される、とまとめることができると言えよう。

4.3.4 製本・販売

執筆者および編著者から校正作業が終わると、本作りの過程は、印刷・製本を経て、販売と最終的な段階に至る。インタビュー協力者である編集者によると、これらの過程は、トラブルが発生しない限り、決まった人工物が使われるルーチン的な作業が大部分であり、本報告が対象とした書籍についても通常の作業が行われた、とのことである。

販売に関して、編集者は、広告用のチラシを作成した。また、今回の書籍ではないが、インターネットの書評では有名なアルファブロガーに書籍を献本する、ということも行っている。

5. まとめと今後の課題

本報告では、ある書籍を対象に本作りの現場で使われる人工物のあり方とその変化を検討した。本作りにおいては、編集者、編著者、執筆者など立場の異なる複数の人間が、人工物（物理的な道具）ばかりでなく、心理的道具をさまざまに使用しながら行われることを記述することができた。認知心理学や認知科学の観点から、この本作りの現場にアプローチする可能性を示すことができたであろう。

一方で、本報告には、インタビュー調査の限界による問題がある。すなわち、インタビュー協力者にとっては、過去に体験したことを回顧することを求めており、回答内容の妥当性や信頼性については、別の方法で得られたデータとの関連づけや対応付けを行うことが必要であろう。今後の課題として、報告者自身による参与観察、原稿作成時に行動報告法によるデータ収集、出版社や印刷会社へのフィールド調査、などが行う必要があると言えるだろう。

引用文献

- 五十嵐茂(2008).バフチンの対話理論と編集の思想 質的心理学研究 7, 78-95.
- 三輪眞木子・高橋秀明(2008). <中間報告>他領域の研究者・学生との科学ミスコミュニケーション事例調査、科学におけるコミュニケーション2007 総合研究大学院大学葉山高等研究センター研究プロジェクト「人間と科学」研究課題「科学におけるコミュニケーション」231-240.
- 茂呂雄二(1988).なぜ人は書くのか 東京大学出版会
- 高橋秀明(2006).マスメディア、マルチメディアって何だろう? ―メディアの認知心理学―、太田信夫(編) 記憶の心理学と現代社会 有斐閣 pp.81-90.
- 高橋秀明(2007).説明表現とメディア、比留間太白・山本博樹(編) 説明の心理学:説明社会への理論・実践的アプローチ ナカニシヤ出版 pp.94-109.
- 高橋秀明(2008a).インタビュー調査における回答手がかりについて 日本心理学会第72回大会発表論文集18.
- 高橋秀明(2008b).本作りの現場で使われる人工物とその発達：事例調査中間報告 人工物発達学 1(1), 123-134.
- 高橋秀明・山本博樹(編)(2002).メディア心理学入門 学文社
- 竹村和久(編)(2000).消費行動の社会心理学―消費する人間のこころと行動 北大路書房
- 内田伸子(1990).子どもの文章―書くこと考えること 東京大学出版会
- Vygotsky, L. S.(1979).The instrumental method in psychology. In J. V. Wertsch (Trans. & Ed.), The concept of activity in Soviet psychology. M. E. Sharpe. pp.134-143.

付録

付録1. インタビューガイド 編著者向け

0 研究概要

「本作りの現場での人工物・メディアのあり方事例調査」にご協力くださり、ありがとうございます。この調査は、本作りの現場での人工物・メディアのあり方の事例を収集・分析し、著者、編者、編集者あるいは出版社、および将来の読者というように、異なる立場の多くの関係者によって進められる本作りが、より良いものになるような方策を探ることを目的としています。2時間程度のインタビューを通じて、「(書籍名)」でのご経験を中心にお聞きします。インタビューを録音し、後ほど書き

起こしますが、内容を読むのは私、高橋のみです。調査の結果は全体として、学会等で発表する予定ですが、あなたのお名前やあなた個人を識別できるような情報を公表することはありません。

このインタビューでは、「(書籍名)」を題材にして、あなたが経験した人工物・メディアのあり方について、順を追って質問します。質問へのあなたの回答を通して私たちが知りたいのは、人工物・メディアの利用において、あなたが実際に何をしたか、何を考えたか、どう感じたかといった点です。あなたの一般的な行動や、こうすべきだったということを知りたいわけではありません。では、録音を開始します。

具体的なインタビューを開始する前に、インタビュー調査協力の同意書にサインを頂きたいと思います。これは、特に、インタビューの方法について、さらに、インタビューで得られた情報の扱いについて、事前に、あなたと担当者である高橋との間で同意しておきたいことです。

(インタビュー調査協力の同意書：読み上げ、質疑、サインをお願いする)

では、インタビューを開始します。

1.0 あなたのご専門は何ですか？

1.1 あなたが最近取り組んでいる研究は、どんなものですか？

1.2 「(書籍名)」では、あなたは、編者の役割について、どのように感じていましたか？そして、それは、十分に果たすことができたと考えていますか？

1.3 「(書籍名)」では、あなたは、第〇章「××」という章をご担当されていますが、この章では、どんな役割や内容を期待されていると感じていましたか？そして、それは、完成原稿で達成されましたか？

2.0 あなたが編者として、本を作ろうと思ったきっかけから、本が完成するまで、どのような出来事があったか、についてお話ししたいと思います。

2.1 何時ごろどんなきっかけや目的で、その出来事がありましたか？それにはどのような人工物やメディアが使われましたか？

2.3 その出来事について、それが始まる前の状況、その進展について、うまく運ばなかった場合にはどのようにしてうまく運ぶように努力や工夫をしたか、出来事の結末を含めて、あなたがしたこと、考えたこと、感じたことを、あなた自身の物語として順を追って話してください。

2.4 その出来事がうまく運ばなかった場合には、誰か

に相談したり、その経験を誰かと共有したことはありませんか？ その際に使用した人工物やメディアについても教えてください。

（できるだけ順番に、思い出すことのできる出来事について、2.0 から 2.4 を繰り返す）

3.0 あなたが担当された第〇章「××」という章の執筆について、その最初の出来事から完成まで、どのような出来事があったか、についてお話ししたいと思っています。

3.1 何時ごろどんなきっかけや目的で、その出来事がありましたか？ それにはどのような人工物やメディアが使われていましたか？

3.2 その出来事は、うまく運びましたか？ うまく運ばないという経験をされましたか？

3.3 その出来事について、それが始まる前の状況、その進展について、うまく運ばなかった場合にはどのようにしてうまく運ぶように努力や工夫をしたか、出来事の結末を含めて、あなたがしたこと、考えたこと、感じたことを、あなた自身の物語として順を追って話してください。

3.4 その出来事がうまく運ばなかった場合には、誰かに相談したり、その経験を誰かと共有したことはありませんか？ その際に使用した人工物やメディアについても教えてください。

（できるだけ順番に、思い出すことのできる出来事について、3.0 から 3.4 を繰り返す）

4. 「本作りの現場での人工物・メディアのあり方」について、ご意見があれば、自由に述べてください。

5. 「(書籍名)」の営業ということについて、何かしていることがあれば、ご自由に話してください。

5.1 将来の読者を、どのように想定していましたか？ そのために、どのような工夫や努力をしましたか？ 今現在はいかがですか？

6. 最後に、あなたご自身についてお尋ねします。

6.1 あなたの最終学歴とこれまでの研究者としてのご経歴（誰とどんな研究をしたのか）を教えてください？

6.2 差し支えなければ、年齢を教えてください。

7. 以上でインタビューは終わりです。ご協力ありがとうございました。後ほど、インタビューの録音を書き起こして、他の協力者のインタビューと合わせて分析します。その際に、インタビューで聞き漏らしたことがあれば再度質問させていただくことは可能ですか？ その

場合の連絡先を教えてください。（名刺、電話番号、電子メールなど）

付録 2. インタビューガイド 編集者出版社向け

0 研究概要

「本作りの現場での人工物・メディアのあり方事例調査」にご協力くださり、ありがとうございます。この調査は、本作りの現場での人工物・メディアのあり方の事例を収集・分析し、著者、編者、編集者あるいは出版社、および将来の読者というように、異なる立場の多くの関係者によって進められる本作りが、より良いものになるような方策を探ることを目的としています。2 時間程度のインタビューを通じて、「(書籍名)」でのご経験を中心にお聞きします。インタビューを録音し、後ほど書き起こしますが、内容を読むのは私、高橋のみです。調査の結果は全体として、学会等で発表する予定ですが、あなたのお名前やあなた個人を識別できるような情報を公表することはありません。

このインタビューでは、「(書籍名)」を題材にして、あなたが経験した人工物・メディアのあり方について、順を追って質問します。質問へのあなたの回答を通して私たちが知りたいのは、人工物・メディアの利用において、あなたが実際に何をしたか、何を考えたか、どう感じたかといった点です。あなたの一般的な行動や、こうすべきだったということを知りたいわけではありません。では、録音を開始します。

具体的なインタビューを開始する前に、インタビュー調査協力の同意書にサインを頂きたいと思います。これは、特に、インタビューの方法について、さらに、インタビューで得られた情報の扱いについて、事前に、あなたと担当者である高橋との間で同意しておきたいことです。

（インタビュー調査協力の同意書：読み上げ、質疑、サインをお願いする）

では、インタビューを開始します。

1.0 あなたのお仕事は何ですか？

1.1 あなたが最近取り組んでいるお仕事は、どんなものですか？

1.2 「(書籍名)」では、あなたは、編集者・出版社の役割について、どのように感じていましたか？ そして、それは、十分に果たすことができたと考えていますか？ 他の書籍などの時と比べて、違いなどはありませんでしたか？

2.0 あなたが編集者・出版社として、本を作ろうと思ったきっかけから、本が完成するまで、どのような出来事があったか、についてお話しいただきたいと思います。

2.1 何時ごろどんなきっかけや目的で、その出来事がありましたか？ その出来事には、どのような人が関わっていましたか？ それにはどのような人工物やメディアが使われましたか？

2.3 その出来事について、それが始まる前の状況、その進展について、うまく運ばなかった場合にはどのようにしてうまく運ぶように努力や工夫をしたか、出来事の結末を含めて、あなたがしたこと、考えたこと、感じたことを、あなた自身の物語として順を追って話してください。

2.4 その出来事がうまく運ばなかった場合には、誰かに相談したり、その経験を誰かと共有したことはありますか？ その際に使用した人工物やメディアについても教えてください。

(できるだけ順番に、思い出すことのできる出来事について、2.0 から 2.4 を繰り返す)

3. 「本作りの現場での人工物・メディアのあり方」について、ご意見があれば、自由に述べてください。

4. 「(書籍名)」の営業ということについて、何かしていることがあれば、ご自由に話してください。

4.1 将来の読者を、どのように想定していましたか？ そのために、どのような工夫や努力をしましたか？ 今現在はいかがですか？

5. 最後に、あなたご自身についてお尋ねします。

5.1 あなたの最終学歴とこれまでのお仕事のご経歴（誰とどんなお仕事をしたのか）を教えてください。最終学歴では、どのような研究をされましたか？

5.2 差し支えなければ、年齢を教えてください。

6. 以上でインタビューは終わりです。ご協力ありがとうございました。後ほど、インタビューの録音を書き起こして、他の協力者のインタビューと合わせて分析します。その際に、インタビューで聞き漏らしたことがあれば再度質問させていただくことは可能ですか？ その場合の連絡先を教えてください。(名刺、電話番号、電子メールなど)

付録3. インタビューガイド 執筆者向け

0 研究概要

「本作りの現場での人工物・メディアのあり方事例調査」にご協力くださり、ありがとうございます。この調査は、本作りの現場での人工物・メディアのあり方の事例を収集・分析し、著者、編者、編集者あるいは出版社、および将来の読者というように、異なる立場の多くの関係者によって進められる本作りが、より良いものになるような方策を探ることを目的としています。2 時間程度のインタビューを通じて、「(書籍名)」でのご経験を中心にお聞きします。インタビューを録音し、後ほど書き起こしますが、内容を読むのは私、高橋のみです。調査の結果は全体として、学会等で発表する予定ですが、あなたのお名前やあなた個人を識別できるような情報を公表することはありません。

このインタビューでは、「(書籍名)」を題材にして、あなたが経験した人工物・メディアのあり方について、順を追って質問します。質問へのあなたの回答を通して私たちが知りたいのは、人工物・メディアの利用において、あなたが実際に何をしたか、何を考えたか、どう感じたかといった点です。あなたの一般的な行動や、こうすべきだったということを知りたいわけではありません。

では、録音を開始します。

具体的なインタビューを開始する前に、インタビュー調査協力の同意書にサインを頂きたいと思います。これは、特に、インタビューの方法について、さらに、インタビューで得られた情報の扱いについて、事前に、あなたと担当者である高橋との間で同意しておきたいことです。

(インタビュー調査協力の同意書：読み上げ、質疑、サインをお願いする)

では、インタビューを開始します。

1.0 あなたのご専門は何ですか？

1.1 あなたが最近取り組んでいる研究は、どんなものですか？

1.2 「(書籍名)」では、あなたは、第〇章「××」という章をご担当されていますが、この章では、どんな役割や内容を期待されていると感じていましたか？ そして、それは、完成原稿で達成されましたか？

2.0 あなたが担当された第〇章「××」という章の執筆について、その最初の出来事から完成まで、どのような出来事があったか、についてお話しいただきたいと思います。

2.1 何時ごろどんなきっかけや目的で、その出来事がありましたか？ それにはどのような人工物やメディアが使われていましたか？

2.2 その出来事は、うまく運びましたか？ うまく運ば

ないという経験をされましたか？

2.3 その出来事について、それが始まる前の状況、その進展について、うまく運ばなかった場合にはどのようにしてうまく運ぶように努力や工夫をしたか、出来事の結末を含めて、あなたがしたこと、考えたこと、感じたことを、あなた自身の物語として順を追って話してください。

2.4 その出来事がうまく運ばなかった場合には、誰かに相談したり、その経験を誰かと共有したことはありますか？ その際に使用した人工物やメディアについても教えてください。

(できるだけ順番に、思い出すことのできる出来事について、2.0 から 2.4 を繰り返す)

3. 「本作りの現場での人工物・メディアのあり方」について、ご意見があれば、自由に述べてください。

4. 「(書籍名)」の営業ということについて、何かしていることがあれば、ご自由に話してください。

4.1 将来の読者を、どのように想定していましたか？ そのために、どのような工夫や努力をしましたか？ 今現在はいかがですか？

5. 最後に、あなたご自身についてお尋ねします。

5.1 あなたの最終学歴とこれまでの研究者としてのご経歴(誰とどんな研究をしたのか)を教えてください？

5.2 差し支えなければ、年齢を教えてください。

6. 以上でインタビューは終わりです。ご協力ありがとうございました。後ほど、インタビューの録音を書き起こして、他の協力者のインタビューと合わせて分析します。その際に、インタビューで聞き漏らしたことがあれば再度質問させていただくことは可能ですか？ その場合の連絡先を教えてください。(名刺、電話番号、電子メールなど)

付録 4. インタビュー調査協力の同意書

インタビュー調査協力の同意書

「本作りの現場での人工物・メディアのあり方事例調査」のためのインタビューにご協力くださり、ありがとうございます。このインタビューには最長2時間ほどの時間がかかります。インタビューへのご協力は任意です。このインタビューを通じてご提供いただいた情報に、第三者が触れることはありません。また、研究成果の報告

では、複数の協力者から収集したデータを統合した形で扱いますので、個人名や機関名が出ることはありません。なお、研究データに誤りがないよう、インタビューの音声を記録させていただきます。この記録は研究データとして慎重に扱います。

もし、質問に答えたくない場合には、お答えにならなくても結構です。また、インタビュー調査への協力を中断したい場合には、その旨お申し出があればいつでも中断します。

この同意書は、インタビューの協力者と担当者として、1部ずつ保管します。

以上の条件で、「本作りの現場での人工物・メディアのあり方事例調査」のインタビュー調査に協力することに同意いたします。

平成 年 月 日 (曜)

協力者

お名前

御所属

ご連絡先

インタビュー担当者

サイン

メディア教育開発センター

〒261-0014 千葉県美浜区若葉2-12

043-298-3265 高橋

付録 5. 日本心理学会第72回大会発表原稿

開催校 北海道大学

発表日 2008. 9. 19 (金)

書誌情報 高橋秀明 2008 インタビュー調査における回答手がかりについて 日本心理学会第72回大会発表論文集 18.

インタビュー調査における回答手がかりについて

高橋 秀明

(メディア教育開発センター・総合研究大学院大学)

Key words: インタビュー 回答手がかり 人工物発達学

問題

インタビュー調査が使われる領域は広範囲に及んでいる。最近では、さまざまな人工物を開発する際に、ユーザの要求を明らかにするために、あるいは人工物の使いやすさを評価するために、インタビュー調査を中心とした質的な方法論が使われることも多くなってきた。本論では、そのようなインタビュー調査において、人工物の開発において使われてきた人工物を手がかりとして用いて、インタビューに回答するという興味深い現象について報告する。

方法

調査対象

人工物開発の現場として、本論では、本作りの過程を対象とした。その動機や背景は、1)現代のICT技術の発展に伴い、本というメディア・人工物のあり方が変わりつつある、2)本作りの現場にはさまざまな立場の人間や集団が関与しており、その間で行われるコミュニケーションを対象とするのは認知心理学の観点から興味深い、ということである。

インタビュー協力者と調査期間・場所

ある1冊の書籍について、その編集者(出版社)1名、編著者2名、執筆者1名を対象とした。編著者2名については、第1編著者を編著者1、第2編著者を編著者2と区別する。執筆者1名については、以下では、執筆者〇と記す。

実施期間は2007年12月であり、インタビューは全て関西地方において実施した。

データ収集方法

インタビュー調査では、クリティカルインシデント法を応用した半構造化インタビューを採用した。クリティカルインシデント法とは、主に、事故分析において使用されてきた方法であり、事故という出来事に関連して、当事者の失敗経験を、その文脈に関する情報とともに想起してもらうものである。本論では、本作りの過程におけるイベントを、当事者が失敗とか問題とか感じていないことも含めて、そこで使用された人工物に注目してもらい答えてもらうこととした。

インタビュー所要時間は一人、最大120分とした。本作りの過程でのイベントとして各種各様のものがあると想定されたので、所要時間を通常のインタビューよりも長く取っている。インタビュー調査を開始する前に、インタビューの進め方、データの記録、得られたデータの扱いに関して、インタビュー調査協力の同意書に署名の上、研究者と協力者とで一部ずつ交換した。インタビュー場所は、インタビュー協力者の所属機関とした。すなわち、訪問調査である。インタビューは、インタビュー

協力者の許可が得られてから、ICレコーダによって録音した。インタビュー実施後、できるだけ早い時期に、インタビューメモを作成した。

データ分析方法

記録した音声データの書き起こしを行い、その内容分析を行った。すなわち、回答されたイベントの構造を分析し、収集したイベントのパターンを類型化して、概念枠組みを構築した。

結果と考察

インタビュー実施時に、インタビュー協力者がインタビューに回答する際、すなわちイベントを想起する際に利用する手がかりに、協力者によって以下のような違いが見られた。これは、それぞれのインタビュー協力者が本作りの際に、どのような役割で、どのような人工物を使って作業を行っていたかということに、主に関連していると考えられる。

・編集者(出版社):主に記憶に基づいて回答 本作りの過程におけるイベントとしては、実物(印刷された原稿や文書)という人工物を使用しているものが多い。編集者は、編著者や執筆者との連絡には、電子メールと郵便・宅配便による文書の通信とを使用していた。

・編著者1:主にラップトップPCに保存されている電子メールに基づいて回答 編著者1は、対象とした本において、最も責任ある立場である人物だが、他の人物との連絡は基本的には電子メールで行っていた。原稿が上がってきて、編集作業に移ってからは、印刷された原稿や文書を使用している作業も多く行ってきた。

・編著者2:主に当該の本に関わる資料、文書、時々電子メールに基づいて回答 編著者2は、基本的には、資料や文書に基づいて回答した。日時など微妙な問いに回答する際には、自分のデスクトップPCに残された電子メールを確認することを行った。

・執筆者〇:主にラップトップPCに保存されている文書ファイルに基づいて回答 執筆者〇は、執筆の際に使用したラップトップPCに、執筆の途上のファイルを保存していた。執筆の際には、まずは裏紙に筆記具でメモを取り、ある程度まとまったらPCのワープロで電子ファイルに入力しすぐに印刷しておく、その印刷された用紙にまたメモを付け足していく、というようにして原稿を完成させた。

インタビュー協力者は、過去の体験を想起して回答しているわけであるが、あくまでも調査時において再構成しながらそうしていると考えることができる。回答の手がかりは、過去の体験を媒介した人工物として捉えることもできるが、調査時の再構成を媒介している人工物としても捉えることができる。あるいは、人工物に結晶化

された過去の体験が、現在の人工物によって解凍された、と考えることもできよう。また、回答の手がかりを自発的に利用できるようにしておくことによって、インタビュー調査の妥当性や信頼性が担保されていると言えよう。

謝辞 本研究は、総合研究大学院大学葉山高等研究センター・プロジェクト「人間と科学」『人工物発達に関する総合的研究』の補助を受けた。
(Takahashi Hideaki)